

宮城県白石市教育委員会

【総人口】31,088人

【主担当部局】白石市教育委員会学校管理課
(公立幼稚園・公立小学校担当)

【主な関係部局】白石市保健福祉部子ども家庭課
(保育所・認定こども園担当)

【自治体 関連URL】<https://www.city.shiroishi.miagi.jp>

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数		1	1	5	3				10	
園児・ 児童数		36	160	149	264				1208	

事業実施地域・ 協力園校	【実施地域】 市全体
	【協力園校】 幼：公立幼稚園1園、公立保育所5園、私立幼稚園・認定こども園1園、私立保育所3園 小：公立小学校9校

架け橋期の カリキュラム開発 会議	【会議委員人数】 16名	【開催数】 3回
	【委員属性】 公立幼稚園長1名、公立保育所長1名、私立幼稚園・認定こども園長1名、私立保育所長1名、公立小学校長4名、公立中学校長1名、教員養成大学教授1名、国立大学加齢医学研究所助教1名、小学校・幼稚園担当課長1名、保育所担当課長1名、事務局として3名	

架け橋期の コーディネーター等	【配置人数】 2名（教育委員会に所属）	架け橋期の カリキュラム	【開発主体】 市全体、架け橋プログラム運営会議のメンバーで (1公立幼稚園、5公立保育所、9公立小学校)
	【経歴】 ・元公立保育所長(6年度から幼児教育アドバイザー) ・元公立小学校長		

カリキュラム開発会議

【架け橋期のカリキュラムに関する議論】

※ 5年度から私立幼稚園代表及び私立保育所代表の2名がメンバーに加わる

＜主な協議事項＞

- ① 保育体験・小学校体験研修会についての話し合い
 - ・実施時期、内容、参加対象者、情報交換の視点について確認
 - 両体験とも、子供たちの姿や変容を見る機会であることから、各園、各小学校から1名は同じ職員が2回とも参加する。
 - それ以外は、可能な限り多くの教師や保育士等が参加できるように体制を整える
 - ・体験研修のねらい、成果と課題、検証方法を市全体で共有できるように可視化していく
- ② 架け橋期のカリキュラムについての話し合い及び助言
 - ・各園、各小学校がそれぞれのカリキュラムを互いに理解できるか話し合う機会をもつ
 - ・ねらいや育みたい力の表現はインクルーシブの視点を大切にした表現にしていきたい
 - ・実践等から聞き取ったことをカリキュラムに反映させていく。その一つとして子供自身の声を拾い上げたい（今後の課題）
 - ・本市の独自性のある取組として「p 4 c」を全体計画に位置付けていきたい
 - ・生活をつなぐの視点については特に、家庭の理解と協力が必要とされることから、家庭への周知方法や理解を得る方法を検討していく
- ③ 就学等に関する5歳児保護者の意識調査について
 - ・幼児教育施設に希望することの把握
 - ・小学校入学に向けての不安や心配事の把握
 - ※結果をカリキュラムや研修に反映させていく



＜運営会議の設置＞

開発会議での議論を受け、実務的・具体的な取組を進めていくため、メンバーは幼保小連携担当小学校長、公立・私立幼稚教育施設の各園長、各小学校長から推薦された教諭、保健福祉部子供家庭課及び教育委員会学校管理課担当者で構成（メンバー36名）。5年度から私立幼稚園・認定こども園及び私立保育所も加わり、市全体で取り組みを行う。

【会議設置による成果と課題】

＜成果＞

- ① 5年度から私立の幼稚園・保育所も開発会議及び運営（実務者）会議、研修会に参加し、市内全体で事業に取り組むことができるようになり、架け橋プログラム事業の広がりとともに理解がより深まってきた。
- ② 計画的に運営会議（幼保小中代表と関係機関職員による実務者会議）や各ブロックでの情報交換の場を適宜設定することで幼保小間の顔が見える関係づくりができた。そのことにより、特に近隣にある園や小学校での交流活動が日常的に行われるようになってきた。
- ③ 開発会議のメンバーである大学教授等による専門性の高い理解研修会を通して、架け橋プログラムの内容や重要性の理解の深化につながるとともに、架け橋期担当以外の保育士、教職員の理解を得ることにつながった。また、議論を交わすことで、互いの立場の理解や自身の指導の改善にもつながってきている。

＜課題＞

- ① PDCAサイクルが可視化できるように架け橋期のカリキュラム全体計画（案）を隨時、項目も検討しながら加筆修正し、より機能的なものにしていく。また、p 4 cの取組を本市の独自性のあるものとしてカリキュラムに位置付けたい。
- ② 実践を振り返る会や各意識調査等から聞き取ったことをカリキュラムに反映させていく。特に、架け橋期の対象である子供自身の声を拾い上げてカリキュラムを更新していく。

架け橋期のカリキュラム

【開発プロセス】

- 本市は令和4年度に全ての公立幼稚園、公立保育所、公立小学校の代表者（運営会議メンバー）が集まり、「目指す子供の姿」を話し合い、「自立」「協同」「豊かな感性と表現」を特に重要視しありカリキュラムに盛り込むように配慮した。
また、3つのつなぐ（生活をつなぐ、ひとをつなぐ、学びをつなぐ）の視点により運営会議メンバー（公立保育園幼稚園長、5歳児担任代表）が主体となり、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識しながら、具体的な姿をイメージし話し合いを重ね、いわゆるアプローチカリキュラムを作成した。
1年生担任代表メンバーは、それを受け週案、月案タイプのスタートカリキュラムを作成し、併せて生活科を中心とした単元デザインを作成し、その中に、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とのつながりを組み入れた。
- 共通の視点で幼保小をつなぐために、今年度から市内全ての私立の幼稚園・認定こども園、保育所も入り、理解研修や一日体験研修を実施した。

〈一日保育体験研修・小学校体験研修の内容〉 各2回 計4回実施

8月と1月に保育体験研修を、4月と1月に小学校体験研修を行った。保育体験研修は小学校教師が5歳児の学級で、小学校体験研修は園の教師・保育士等が1年生の学級で丸一日間活動に携わり、その後、情報交換を行った。この研修は、幼児教育と小学校教育の内容や環境の構成、一日の流れの理解を促すとともに、子供たちの実態や成長の様子を把握する機会となっている。立地条件の良い幼保小に関しては1～6年の担任教諭全員が授業の合間に縫って、体験研修や見学研修を行い、幼児理解に努めた。また、園児が授業や行事に定期的に参加できるように配慮していることは双方で架け橋期の重要性、必要性を共有できている事例として報告されている。

〈3ブロックごとにによる研修後の事後情報交換会〉

研修後は3つのブロックごとに事後情報交換会を行い、他の活動内容や子供たちの姿、悩み等を共有し、改善を踏まえた実践につなげる機会となっている。体験終了後に行われる振り返りの会を現場で行うことで、疑問点がその場で解消したり、発見や気付きが得られたり、子供の姿の相互理解につながった。



保育体験研修の様子

【架け橋期のカリキュラムの概要】

- いわゆるアプローチカリキュラムをより具体化するために、従来のカリキュラムの全体計画を見直し指導案に盛り込みやすいよう細部にわたり改善した。
- スタートカリキュラムについては、週案タイプに、幼保からのつながりを意識した授業のポイントを取り入れた。また、生活科を中心とした単元デザインを作成し、指導者が意図的に環境を構成したり、単元間や教科間を関連付けたりできるようにした。
- 5年度は1つの中学校区（小・中教員と市教委指導主事）で集まり、架け橋期の学びの連続性を見据えた全体構想図を作成した。今後は他の2つのブロックでも作成できるようにつなげていく。
- 架け橋プログラムのカリキュラムについては幼小の様式について更に検討を要すると思われる。利用する側が授業や保育に見通しをもって自分の計画に生かせるように改善を図る必要がある。きめ細やかすぎるとそれにしばられてしまう心配があるとの声があるため実践者側の声を反映させながら改良して行きたい。

架け橋期のカリキュラム

【架け橋期のカリキュラムの実践】

○ カリキュラム研修会（4月）と実践を振り返る会（11月）の実施。

実践・検証の核となる5歳児及び小学校第1学年の教師等を対象に、実践に向けたカリキュラムの内容についての研修と各園・小学校の実践について話し合う機会を設定し、改善につなげていく。

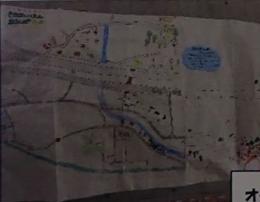
<実践を振り返る会から>

自分の園、校の実践を発表したり聞いたりすることで自分の保育、授業の振り返りができた。更に1つの実践事例を通して幼児期の終わりまでに育ってほしい姿のどんなところが育まれているか、さらに小学校の授業にどうつながっていくのか、ワークショップを行うことで共通理解が進んだ。

園の実践例を基にした、5歳児担当と1学年担任によるワークショップの資料

アプローチカリキュラム 実践例

北保育園 下村

活動名	名人さん・名物を探そう！「園周辺マップを作ろう！」
活動の流れ	◇子どもの声・姿 ●保育士の援助 △環境構成の工夫 ○活動の内容
5月下旬	△園周辺の道が描いてあるまっさらなマップを準備し、園外保育へ行った際に見つけたもの、発見したものを描き足していく、園周辺のマップを作ることを提案する。 ◇「いいね！楽しそう！」「どんなマップになるのかな」など 楽しみにする姿が見られた。 ◇春の遠足では、道中、「マップに描くものなにかかるかな・・・」「あ！あそこにお花がある！」 「オタマジャクシたくさんいたよ！」などたくさんの発見を見つめていた。
5月24日 春の遠足（神明社）	●遠足の道中では、子ども達が周りの環境に興味が持てるよう、声がけする。 (・「ここには田んぼがあるんだね！何かいるかな？見てみよう。」「あそこにはキャベツ畑があるね！ちょうど多くたくさんいるね！」など) ◇マップ作りでは、子ども達が自分で見つけたものをイラストに描いてマップに張り付けていた。マップに少しずつ絵が足されていく様子に「ここにおたまじゃくしいたよね！」「お花もあったね！」など友達と話す姿が見られた。
5月29日 マップ作り	   <p>神社の周りは木が多いかったです！</p> <p>オタマジャクシたくさんいたね！</p> <p>○散歩へ行きたびに見つけたものを付け足していく。</p> <p>◇ある女児から、マップを指して、「ここお母さん働いてる！」と話す姿が見られた。</p>

架け橋期のカリキュラム

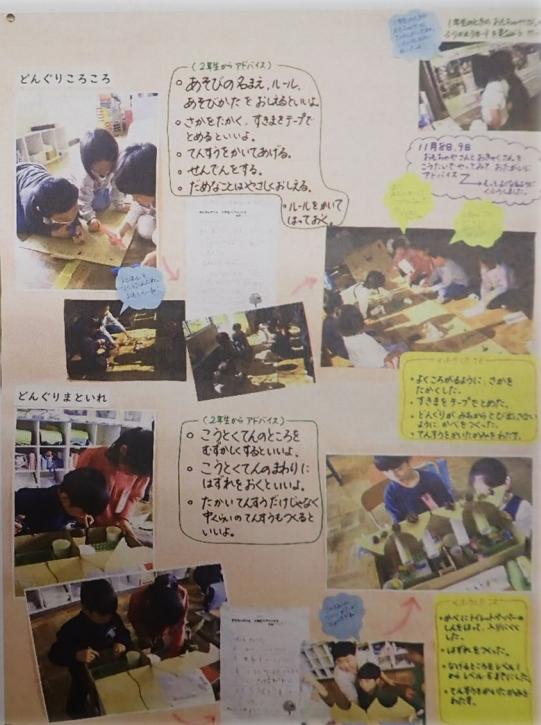
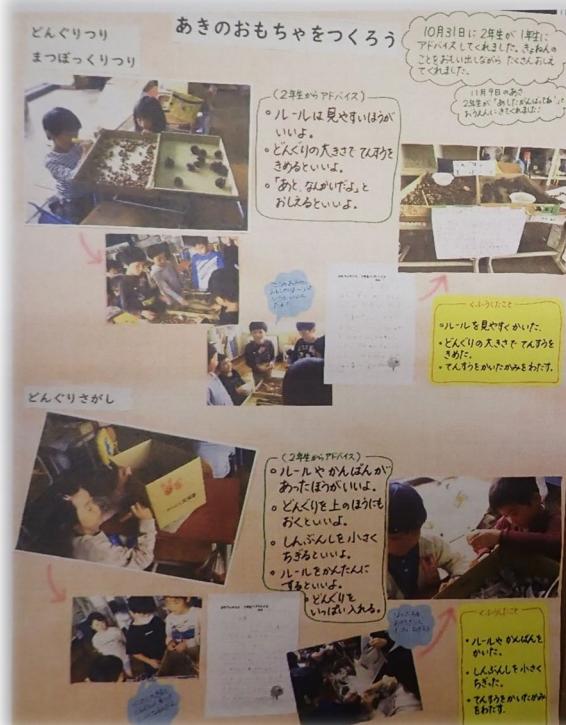
【架け橋期のカリキュラムの実践】

○ 子供たちの交流活動

協力園、校の担当者同士で計画を立案し、交流の目的や意義を明確にし実践が行われた。園・校を行き来するだけでなく、オンラインで交流したり、手紙を交換したり、公園で合流して「秋探し」をするなど、幼保小の子供が同じ経験、活動を経験することで親しくなるきっかけができていった。その遊びや交流の積み重ねから遊びが深まり、知的好奇心が芽生え、試したり工夫したりするなど、子供の姿の変容が見られた。

小学校教諭は活動の様子を写真に収めドキュメンテーション形式でまとめた。いつでもだれでも見られるように廊下に掲示することで、会話が弾み次回の活動や交流への期待感が膨らむ声も聞かれた。また、実践に当たり、幼稚教育施設で実践しているドキュメンテーションを活用して学習過程を示すことにより、「面白かった、楽しかった」という振り返りが多くなりがちな子供も、「あの時は〇〇なことがあって〇〇風にしたからうまくいった」などと自らの思考をたどり、具体的に振り返る姿が見られるよう変化してきた。学びの広がりや深まりにつながるよう、次年度も効果的に活用した実践を重ねていきたい。

○ 交流や保育体験、授業体験後に時間を取りて振り返ることを定期的に重ねることが、子供理解につながり、架け橋期のカリキュラムの改善につながる。



ドキュメンテーションの例

生活科「たのしいあきいっぱい」ドキュメンテーション②



次年度への展望

- (1) 開発会議 4回（4月、7月、11月、1月）
 　・架け橋期カリキュラム内容、成果等分析、事業報告及び成果資料等への指導助言、事業終了後の本市の架け橋プログラムの継続できる体制への指導助言
- (2) 運営会議（実務者による会議）7回（4月、6月、7月、9月、10月、12月、3月）
 　・開発会議を受け、架け橋期カリキュラム内容の確認、研修内容の成果・課題の共有、交流活動の内容の精査、今後の方向・計画の確認 等)
 　→会議後、各園・校での話題提供（調査研究の共有）
 　・本市の組織再編に伴う会議メンバーの更新、7年度以降の会議運営についての協議
 　・会議内容に応じた教務主任等の参加（全体計画への研修日程の調整 等）
- (3) 各部会の実施：適時
 　・研修部：研修全体計画の作成（ねらい、目的、対象、具体的な内容の可視化）
 　・カリキュラム部：カリキュラム全体計画の修正、他中学校区の全体計画（案）の作成
 　・記録広報部：成果資料の作成、なないろのかけはし（取組の紹介）の発行
 　・総務涉外部：理解研修会の企画・準備会の運営
- (4) 架け橋期のカリキュラム理解研修会及び実践振り返りの会（4月、11月）
 　・4月：各園校の5歳児及び小学校1年生担当者を対象として、本市の架け橋期カリキュラムについて研修を行い取組の必要性を共有する。はじめは幼保、小で分かれて行い、その後合同で滑らかな接続について、5歳児・小学1年生の声を接続カリキュラムに反映させるための手立てについて情報交換を行う。
 　・各園校の実践事例の発表を行い、その後学びの連続性や子供の姿についてグループ協議を行い、次年度の計画に反映させたいことを確認する。
- (5) 幼保小間での保育及び小学校体験研修、情報交換会 4回（4月、7月、11月、1月）
 　・保育体験研修：7月（8月）、1月
 　　各小学校から複数名が参加する。運営会議メンバーは2回とも参加し、園児の変容等も研修する機会とする。1回目は夏季休業前に行い、幼稚園での体験研修も実施できるようにする。
 　・小学校体験研修：4月、11月
 　　各園から主として5歳児担当・前年度5歳児担当が参加する。4月は視覚的な環境構成についても情報交換を行う。小学校は生活科の授業を1コマ以上行い授業や活動する子供の姿について情報交換を行う。
 　・情報交換会
 　　体験研修の事後にブロックごとに日時を調整して行う。保育や授業の内容、子供の姿について共有する。
- (6) 架け橋プログラムに関する理解研修会 2回（5月、7月下旬）
 　・5月 佐藤哲也教授（開発会議メンバー）の講演
 　　対象は市内幼保小職員とする。
 　・7月下旬 文部科学省調査官の講演
 　　対象は本市幼保小中職員及び関係機関職員、希望する保護者とし、県内の希望者も参加対象とする。
- (7) 宮城教育大学附属幼稚園視察研修 2回（6月、1月）
 　・6月：本市幼保小関係者で視察研修を行い、保育活動参観と講話・情報交換を行う。
 　　環境構成を中心に遊びの内容について視点をもって参加し、今後の保育に導入したいことなど各園での話題提供にもつなげていく。
 　・1月：一般公開に参加し、保育を学ぶ機会とする。